

ピンポン、明るいチャイムの音が響く。私はお腹を空かせたまま、待ちわびていた夕食を受け取るために玄関のドアを開けた。

「お待たせしましたー！ フーバー・イーツでーす。  
お届けに来ましたー！」  
（うわ……っ。すごく、カッコいい……）

そこに立っていたのは、キャップを目深に被った、モデルのように端正な顔立ちの配達員だった。

彼は慣れた手つきで保温バッグから箱を取り出すと、私に手渡ししながら、じっと私の顔を覗き込んできた。

「……お会計、お願いしまーす」  
「あ、はい。ええと、すみません、大きいのかないんですけど……」

私が財布からお札を取り出すと、彼の低い声が耳元に滑り込んできた。

「あー……それは困ったなあ」

「す、すみません。あの、もしかして、おつり、ないですか……？」

「そう。今日デカいお札の人ばっかでさー。おつり出せないんですよー」

フードデリバリーの彼は困ったような顔をしていた。

（ええ、どうしよう……私がお金、崩して来ないといけない……？ でもこの辺、自販機もコンビニもしばらく歩かないとないんだよね……）

「あ、じゃあさ。俺が立て替えといてあげる。その代わり、お代はお姉さんの体ってことで。……いいよね？」

「え！？」

（私……！？ どういう、こと……っ！？）

固まる私の返事も待たず、彼は玄関に一步踏み込むと、背後でドアを乱暴に閉めた。

ガチャン、という鍵の閉まる音が、静かな廊下に重く響く。

「な、なにをするんですか……っ！」

「だって、お姉さんお金払えないじゃん。……そんな怖い顔しないでよ」

「は、払えます！ お金、あります！」

「でも、ぴったりの金額じゃないと受け取れないよ？ 困ったなあ……」

「そ、そんな……っ」

「お姉さんも支払い済ませたいでしょ？ お金払ってくれなきゃ、ケーサツに言わなきゃだし。だからさ、身体で払ってよお姉さん♡」

彼はそう言って、逃げようとする私の手首をガシッと、掴んだ。

「え、ちょ、ちょっと、あの……っ！」

「お、奥は寝室？ いいね、落ち着いてできそう。……行こっか♡」

青年は空いている方の手で私の腰を強引に抱き寄せると、そのままズルズルと寝室の方へと連れて行かれた。

「ちょ、ちょっと……っ！ あ、あの、あなた……っ！」

「あなた、とか他人行儀すぎ。せっかくだし名前で呼んでよ。俺、大志。そこの大学4年生。……お姉さんの名前は、あとでじっくり教えてね？」

「え、ええっ……？」

いきなり自己紹介が始まり、困惑している間に寝室までやってきていて、彼は私をベッドの上へと押し倒した。

「あっ！ え、っとあのっ……！」

「大丈夫だって。痛いことはしないから。……ね？俺がお姉さんを気持ちよくしてあげるからさ」

彼の手が自然に私の腰に回され、ぐいっと引き寄

せられた。

「ひゃっ……！？ あ、あの……っ」

「そんな顔されるとドキッとするんだけど。お姉さん、反応かわいいな。もっと見せてよ」

声が、耳元で低く響く。冗談めかしているのに、その目は全然笑っていないくて、獲物を狙うみたいに真剣で。

「じゃ、お代……いただきまーす」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、大きな手が私の胸を、Tシャツの上から、ぎゅっと揉んだ。

「ひゃあっ！？ あ、の……っ」

（おっぱい、触られてっ……！？ いきなり……っ！ 手が……っ）

頭の中が真っ白になる。彼の手は驚くほど熱くて、大きくて。私のおっぱいをぐにゅ♡ぐにゅ♡と、揉んでくる。

「……え、お姉さんブラしてないの？ うわ、確信犯じゃん。……えっろ。……ねえ、もしかして俺のこと誘ってた？」

「違う、そなんじゃ……っ、だ、だって……あ、あう……ん、んっ……すぐ、すぐ終わると思ったから……あっ」

（結構厚めのTシャツ着てたし、まさかこんなことされるなんて思わなかったから……！）

ぐにゅぐにゅ♡

おっぱいが指の間からむにゅりと溢れ出す感触が、ダイレクトに伝わってくる。

彼の手は、ただ揉むだけじゃない。手のひら全体で円を描くように圧迫したり、下から持ち上げるようにして重みを確かめたりと、だんだん触り方に変化をつけてくる。

「お姉さんのおっぱい、柔らかいね」

「あ、んんっ……」

こんな風に真っ昼間に、それも今日会ったばかりの配達員の大学生におっぱいを触られるなんて。パニックと、恥ずかしさと……それから、経験したことのないゾワゾワした感覚が背筋を駆け抜ける。

ぐにゅぐにゅ♡ぐにゅぐにゅ♡

「お姉さん、ここ……すっごい敏感だね。指先がちょっと当たっただけでそんなに震えちゃうんだ。…  
…かわいい」

「ふあぁっ、んんっ……や、だ……そこ、は……っ」

親指と人差し指が、Tシャツの布越しに、私の乳首をピンポイントで捉えた。

そして、きゅうううっ♡と、強く摘み上げる。

「ひゃうんっ！ あ、あッ！」

鼻にかかった、自分でも聞いたことがないような、はしたない声が出る。

きゅう♡と、布地と擦れる刺激が、ピリピリ♡と広がる。

（やだ、だめ、そんな……っ。乳首、いじられるの、こんなに……っ！ Tシャツの生地が、ザラザラして……痛いのに、気持ちいい……っ！）

「いい声……。ねえ、もうここ硬くなってるよ？ Tシャツ突き破ってきそう。……ウソつけないんだね、お姉さん」

「ふうう、ち、違うっ、ん、ああんっ、それは、… …」

「えー、感じてないの？ こんなにビンビンに主張してるのに……。ウソつきは、お仕置きしなきゃ」  
「んんっ」

否定したいのに、またおっぱいを揉んでくる。

ぐにゅぐにゅぐにゅぐにゅ♡



「あ、はぁ……ん、んっ、あ、ぁ……っ！」

「ねえ、お姉さん。俺のこと大志くんって呼んでみてよ。……ほら、早く」

「え、うんッ！ は、なん、ですかっ、ぁ」

「いいじゃん、減るもんじゃないし。大志くん、って呼んで？♡」

「ひゃんっっ！」

（あぁっ、だめ……っ！ いきなりそんな、乳首を弾いちゃっ！♡）

「……逃げないんだ。じゃあ、呼んでくれるまでここ、いじめ続けちゃおっかな。ね、呼んで？」

意地悪く囁きながら、今度は両手で私の胸を挟み込むようにして、こりこり♡と核を捏ね回し始めた。

こりこり♡ こりこり♡

「ん、んんう……んんっ！ あ、あっ！ たい、し、くんっ！」

「よくできました♡ ……でも、こんなにビンビンになっちゃってさ。このまま放置する方が可哀想だよね？♡」

こりこり♡ こりこり♡ ぐにゅぐにゅぐにゅぐにゅ  
ゅ♡

「……そんなに力入れなくていいじゃん。俺に任せてよ。ほら、リラックス、リラックス……」

「あうっ！ あッ……は、うっ……んうう、あっ、はあ、はあ、あっ！」

おっぱいを揉まれるたびに、乳首がTシャツに当たって擦れる。

初めはおっぱいを揉まれて、ただびっくりしていただけだったのに、今はもうジクジクと熱い。それにさっきからTシャツの綿の生地が、硬くなった乳首と擦れる。その摩擦さえも、過敏な刺激になっていた。